

平成 24 年 5 月 1 日

陳 述 書

特定非営利活動法人空援隊
理事 倉田宇山

<はじめに>

私が初めて、フィリピンという国に入ったのは、ちょうど、戦後 60 年を迎えた平成 17 年 8 月の事でした。その時点では、遺骨というよりは残留日本兵の情報調査を中心とした取材の為でした。

そこで大量の、野山に放置された御遺骨の惨状を目の当たりにした事が全ての始まりであったと思います。その惨状を本業であるジャーナリストの端くれとして、ビデオに収め、在フィリピン・セブ領事の所に持ち込み、在マニラ大使館に持ち込み、帰国してからも、御遺骨行政を主管する厚労省社会・援護局援護企画課外事室に持ち込み、日本遺族会へ持ち込み、靖国神社で聞き合わせ、戦友会や関係すると思われる所を軒並み訪れては、ビデオを示して、状況を説明しましたが、誰一人として、前向きに聞こうとする人もなく、状況を確認しようとする人もいませんでした。それどころか、逆に何故そんな事しているのか、と聞き返されてしまう始末でした。厚労省記者クラブに情報提供もしてみましたが、全くの無反応状態で、一向にそれらの御遺骨が日本の地を踏める可能性が見いだせず、やむなく、NPO 法人を設立して、自分自身の手で、対処してみしかないと思に至りました。その後、数多くの賛同者のご協力をいただき、現在に至るのですが、この頃ではやっと、メディアも少しは関心を示して、取り上げてくれるようになってきています。その中で、当然の事ですが、批判的な記事を掲載される週刊誌なども出てくるようになりました。しかしそれは、伝聞を集めただけの記事であり、聞いた事をそのまま掲載されているだけのもので、大した影響もないので放置してきました。

今般の NHK のように、公共放送が自ら、2 週間も現地に取材に入って、本裁判で問題としているようなとてもまともな神経と能力を持った人が通常の取材活動をしたとも思えないような偏向報道をしてまで、何故に我々の活動を妨害しようとするのか、その根本的な原因等についても考察を加えながら、以下、陳述させていただきたいと思ます。

<御遺骨の放置されている現状とその周辺事情について>

太平洋戦争終結時における海外戦没者は厚労省の資料によれば、約 240 万人と推定され、その約半分 113 万人以上が未帰還とされています。この内、相手国の事情による

ものや海没遺骨などを差し引いた約 60 万人分が収容可能な御遺骨と考えられています。この内の過半を数える 37 万余りの御遺骨がフィリピン一国に集中しているという事実を知る人は非常に少なく、我々が情報収集を始めた時点においては、国家事業でありながら年間数十体しか帰還させられないという状況が続いていました。しかも、戦後 60 年から、3 年間に限定して、歴史上初の試みとして、日本遺族会が請け負った情報収集委託事業に予算投入を始めてからもその数字に大きな動きは見られませんでした。当初、空援隊独自の調査により、ご遺骨情報を厚労省に提供し、それを元にして、収容作業を進めてもらえる所までは進める事が出来ましたが、それも初年度は 45 体と大した数ではありませんでした。

それが、翌年以降、同様の活動を続けて行く中で、現地にネットワークを張り巡らせ、常駐スタッフや現地採用のスタッフを常時張り付けての情報収集を行うようになり、大きな成果がみられるようになりました。元々、日本の遺骨収集においては戦友や遺族などの有志による活動以外にはほとんど組織的継続的に行われてきた形跡がありません。それも、その収容数の推移を見る事により簡単に確認できる事です。そこへ突然、空援隊のような遺族でも戦友でもない人たちが、遺族だけの為ではなく放置された先人達の為にも是非ともやらなければならないと活動を開始した事により、状況は一気に変わって行く気配を見せ始めてきました。年間に、数回の訪問で情報収集をすと言っても元々限界があり、その結果は年々減少する御遺骨帰還数に如実に表れていました。そんな中で、フィリピンに現地スタッフを常駐させ、常時、情報を収集する方式が定着すれば当然、御遺骨帰還数の大幅増加が見込まれていましたし、現実にその通りになって行ったのです。しかし、それが、本件の NHK 番組内で「ボーンビジネス」等と称された事などにより、事業中止に追い込まれ、空援隊が被った被害は言うに及ばず、事業停止期間に失われて行く御遺骨情報の被害は誰がどのようにして、償うのでしょうか。本当に筆舌に尽くしがたいものがあります。(これについては後述します。)

日本政府による遺骨収集は昭和 27 年の国会決議を元にして、組み立てられ、当時お元気であった戦友達のご尽力により、大いにその困難な状況の中で成果を上げてきたと思います。

しかし、昭和 51 年には、国としての遺骨収集概了宣言が出され、事実上、国家の意思としての遺骨収集は一旦終焉を迎える事になりました。それ以後の遺骨収集は、国家として、現地からの正確な情報があれば、収容するという消極姿勢に変わり、現在に至ります。その間、情報収集を積極的に行わない国に代わって、民間人（主に遺族）が主体となって、懸命の活動が個々に行われますが主体が遺族であり、当然、その思いの強さが原動力にはなるのですが、経済的な裏付けがなく継続的な情報収集などは出来るはずもなく、全く、個人的な思いの実現に終始する事になり、それらも形骸化して行く中で、収集量の激減を招いてしまいます。

国家の無策と不作為は論ずるまでもありませんが、それまでの活動、つまり、年に何

度か現地に赴き、御縁のある遺骨を探すという姿勢と我々のように現実的に現地に拠点を整備し、現地の人を常時雇用して、その信頼を得て継続的に情報収集を行う活動とは元々、根本原理が違います。必然的にその情報の収集量には雲泥の差が出てくるのは至極当然ことですが、情報の精査や確認も含めて、今までやって来られた方々からすると、現地で遺骨を買い集めるような事もなく、大量に集めてくるというのは、理解しがたいことであり、自分達のやり方に対する挑戦だとも思われたのでしょうか。

我々が実績を上げ始め、日本遺族会以外の団体としては初めて、平成21年に情報収集事業の委託を受けて以来、はじめは細かな事から次第に激的な妨害工作活動が随所で行われるようになってきました。

そして、決定的で明白な妨害の端緒は、平成21年11月の政府派遣団を我々が全面的にサポートして、大量の御遺骨を持ち帰ろうとした時に起こりました。政府派遣団が国から正式に派遣されるわけですから、基本的に全ての現地における許認可等の手続きは終わっており、後は回収して、焼骨し、持ち帰るだけという段階で、現地で得ていたはずの許可がどういうわけか突如取り消されるという事態が数度にわたり出来しました。そして、年に一度しか派遣されない政府派遣団が泣く泣く一片の遺骨に触れることもなく現地を撤退することになり、残されたサポートの為に自費で同行していた空援隊の11名のサポート隊が現地の行政府の許認可を新たに取り付けながら、焼骨をし、そして、マニラの大使館まで運びこむという前代未聞の事態となったのです。まさに、厚労省からも警告を受けるような厳しい状況のミッションでしたが、結果としては何の問題もなく、マニラの大使館まで運びこむ事が出来たのは奇跡に近い出来事でした。現地での許認可を取り消すという状況を作り出した人たちが誰であったのかはわかりませんが、現地の行政府の許認可の担当者が突然失踪するなど、何者かの手による妨害工作が明らかになった瞬間でもありました。

その翌年の3月には、地裁での証拠としても提出された週刊文春による伝聞記事が掲載され、いよいよ表に現れて来るような妨害の始まりとなりました。そして、その文春の記事を情報提供と称して、現地を案内し、主導した人物が亀田氏です。その事は彼自身が、文春の記事を契機に空援隊理事を辞める事になった野口健当隊元理事の元に、自らが「文春の記事を書かせたのは私です」などと名乗り出てくる不敵さで明らかです。その後のNHKの取材時にも当然のごとく情報提供者として出演している上に、週刊文春と同じようにNHKの現地取材を主導して、現地を案内して彼らの取材を自らの側に引き込むべく工作を行っていたのは明白であり、その現地での活動の様子は一部ですが、我々のクルーが撮影したビデオに収録されており、NHKとの連携は非常に強固なものがあつた事が明確に見て取れます。

NHK側の取材ディレクターは日本出発前に、空援隊に電話をしてきて取材の申し入れを行っていましたが、その時期は放送予定日の直前の日程であり、元々、我々の活動自体を取材する気はありませんでした。それは、同時期にフィリピン滞在中の私から電

話をして、我々の事業の現地取材の希望も申し入れましたが、時間がないという理由で拒否された事からも明白です。

空援隊の現地の活動を取材する意思ははじめからなく、亀■氏の言い分だけを聞いての取材である事はその時点で既に明らかに偏向しているのですが、それすら意に介さない風であった事が印象的でした。更に、NHK取材クルーに同行して、通訳とガイドをしていた村■氏から、当隊フィリピン本部長に対しても電話が入り、「空援隊はこれから大変な事になるから、こちら側へ来ないか」という誘いや脅しもありました。

<亀■氏について>

これらを主導してきた亀■氏とはどういう人物なのかを調査したところ、愛知県■■にある■■奉賛会という宗教団体らしき団体の副会長をされており、御本人もご遺族の一人であり、お身内をフィリピンのイフガオにおいて亡くされている方であり、その■■奉賛会では、毎年、■■において、慰霊祭を執り行い、全国からフィリピン戦没者のご遺族や有志が参拝されていると言う事でした。更に、この■■においては、御遺族が密かに違法下にフィリピンから持ち帰った御遺骨を大量に安置しているという話を毎年参拝されているという方から聞かされ、その供養料がかなりの額になっているはずだというお話も伺いました。

きっと、亀■氏は自らの権益がおかされるという危機感を持ち、こういう妨害工作を他のご遺族の方々と語らって、始めてしまったのだと思われます。現に、亀■氏と動きを一にし、同様に当隊顧問への嫌がらせを執拗に行っておられる同じフィリピン遺族の本■氏らと共同で、NHKの番組放送とこれも期を一にして、まるであらかじめ準備されていたかのように怪文書まで出回り始めるとともに、顧問議員団先生方の議員会館事務所は言うに及ばず地元事務所にも遺族会として圧力をかけ、顧問を辞めるようにと嫌がらせを執拗に繰り返されました。現に、それが因で空援隊顧問をお辞めになった先生方も少なからずいらっしゃいます。ある先生に至っては明らかに、選挙に対する脅しを公衆の面前でされて閉口したという方もおられ、昨年、検察への告訴も行ったほどです。現在、本件に関しては検察の特捜が調査中とのことですので、これ以上のこの部分への言及は差し控えます。

また、亀■氏はNHK番組にも出てきたイフガオ州ワンワン村において、長年、色々な活動を行ってこられており、電気のない村への支援として、NPO活動として、小型の水力発電機などの提供などをされて、小さな村の一部の住民に対して絶大な影響力を持っておられる事は、我々が遺骨収集に入った事のないワンワン村での事件のでっち上げを画策出来る所からも明白です。しかしながら、その後、我々が現地に入って確認した所によれば、彼らは決して亀■氏を慕っている様子もなく、ごく一部の住民以外は単なる金蔓であると思っていたようですし、設置された水力発電機もすぐに故障し、その後修復はいくら言ってもしてくれないなど心服して協力しているという風でもありま

せん。

思い起こしてみれば、我々が初めて、イフガオ州への調査に入った平成 18 年 7 月に住民の聞き取り調査をしています。その時の取材映像に、昨年、亀■■氏の下で長年の協力者であった人で、フィリピン人にとって非常に珍しい奇妙な自殺をしてしまった人物の映像がありました。その時に、彼はカメラの前で、亀■■氏の名刺を見せながら「頭蓋骨だけを一体分 5000 ペソで買って行った。その他の地域では、色々な物を貰った奴もいるのに、私には毛布数枚しかくれなかった。どうして彼は頭蓋骨以外の骨は持って帰らないのか不思議だった。他の骨はまだあるはずだから、その場所まで案内する」などと証言しており、それ以前からの亀■■氏の永年のイフガオ州通いが決して、現地の人に歓迎だけされていたわけではない事を如実に物語っています。

また、彼は前出のワンワン村からの日本大使館への抗議文を何の目的か事実無根のまま、現地の村議会の議員や村長に書かせて、それを自ら、大使館へ持ち込むという愚虚も行っています。その後の調査で、どうやら、その抗議文の署名をした人の中には、その内容を全く知らないでしかも、本人がその署名をした覚えがないという人まで出てきており、その時点で、我々が全く、ワンワン村へ足を踏み入れていない事実を勘案すると、NHK 側から出された証拠の中にこの書面がある事を見ても NHK 取材の伏線を既にこの時点から引きはじめていた事が窺い知れます。

これらの事実はそのほとんどを地裁における審理中に陳述もしくは証拠提出してありますので、先刻ご承知だと思いますが、明らかに意図を持っての偽計業務妨害罪に当たる行為を週刊文春のみならず、NHK という公共放送を引き入れて、行った事は非常に残念でなりません。

<NHK の取材について>

はじめて、今回の取材陣からの取材依頼があったのは、平成 22 年 8 月の事でした。事務所に番組ディレクターと称する人からかかってきた電話では、フィリピンにおける遺骨収集についての取材を現地に行き行こう事になったので、フィリピンでの遺骨収集を厚労省からの委託を受けてやっておられる空援隊の責任者にお話を伺いたいという事だったので、すぐに了承してお受けする旨を伝え、いつからフィリピンに取材に入るのか聞いたところ、既に組まれていた我々の調査日程と同じような頃でしたので、こちらから「それなら、空援隊の情報収集現場も取材に来て下さい」とお願いしましたが、全くする意思はないようで、現地に行ってからとった連絡時にも再度お願いしてみましたが、どうも番組上全く必要ないという事のようなのでした。今回の番組の主旨から行っても、現状の遺骨収集を厚労省から委託を受けてやっている我々の現場の取材を一切せずにどんな番組になるのだろう、正式な手続きを踏まずにやっている、我々以外の違法な遺骨収集行為を見つけ出してそれでも番組するのだろうかと思案と考えていた事を思い出します。

結果は番組を見ての通りで、どちらにしても始めから、一方的な番組構成で、制作する事になっていた事が良くわかりました。

我々とNHK本番組取材者との唯一の接点となった私へのインタビューは2時間に及ぶ長いものでしたが実際に使われたのは、ほんの1分足らずであり、その1分たらずですら、話の中で出てきたごく一部の言葉を繋ぎ合せて取り上げて、それを糾弾するかのとき内容になっており、それは、同じように番組放送直前に取材された厚労省社会援護局援護企画課■■■■外事室長（当時）からも強硬な抗議がNHKへあったことから、同じ姿勢で、はじめに結論ありきのインタビューと番組であった事が容易に類推されます。

私へのインタビューは、当然、番組キャスターの鎌■■氏からのインタビューという形で始まりましたが、途中で、突然、どうしても私に言わせたいセリフでもあったのでしよう鎌■■氏の追求が手ぬるいと感じたのか番組ディレクターが、インタビューに割り込んできての2対1の少し珍しい形のインタビューへと変わっていきます。事前の説明も何も無く突然、カメラが回っている状態でのディレクターの乱入でしたので、少し驚きましたが、好きにしてもらいました。そして、番組ディレクターの制作上必要な言葉が取れたと思われる所で、インタビューは終わりました。

居丈高に質問してみたり、突然、インタビュアーが変わったりとそれも制作手法の一つなのでしょうが、あまり、品の良いインタビューでなかった事は確かです。その時点で既に「事実に基づいて番組製作をして下さい」というお願いもお伝えしておりました。そんな中で、私に対して、発せられたいくつかのおかしな質問についてですが、特に酷かったのは「フィリピン人の骨が混じっているのではないか？」という執拗な質問でした。

実際に、現場の取材をしておられないのでわからないのだろうなと思いながらお答えしたのですが、現場において、収容した御遺骨が何人の骨であるのかなど、遺骨となってしまった骨だけを見て、その場で即断出来る人間などは世界中探してみてもどこにもいません。それを専門家でもない我々が即断出来る要因などは全くありません。

勿論、子供の遺骨や女性の遺骨などならそれなりに見分けることも出来ますが、日本人かフィリピン人かなどの同じモンゴロイドとなると全くお手上げです。それこそ、DNA検査でもしての結果を待つ事以外にはないのでしょうか、厳密にはDNA検査によりわかる範囲も100%ではありません。勿論、御遺族からのDNA検体を全て取得して、その検体リストとの照合でもするというのならともかく、現実的には240万にも及ぶ海外戦没者のご遺族の全てからDNA検体を提供してもらう事も予算上も無理な話であると聞き及んでいます。

現場において出来る事はせいぜい、ある程度の年代を見極める事や明らかな子供の骨をはじくくらいになってしまいます。しかも、フィリピンにおいては戦前からの日本人町が存在していたように、多くの民間人戦没者が旧日本軍と行動を共にされていた事が

わかっています。この場合の解釈は、そういう地域からの御遺骨であれば、それも含めて戦没者であるとして収集を行ってきました。戦没者とは決して、旧軍兵士だけの事ではないのです。

それとも、民間人であったのなら、日本人であっても持ち帰る事はないとでも言いたいのでしょうか？我々が、現地で情報収集を始めるようになる数年前から、フィリピン側の専門家として、政府派遣団に同行されていたフィリピン大学のフランシスコ・ダタール氏は我々とも何度かご一緒していただきましたが、その中で、御遺骨だけを見て、フィリピン人か日本人かを見分ける事は出来ない、従って、現地において、証人や遺留品を元にして鑑定しているとカメラの前で明言されています。週刊文春が前出記事のものと以前に記事にしていたので、確認いただければとも思います。平成 20 年 7 月の政府応急派遣団におけるそのダタール氏の鑑定自体に疑問を抱いた厚労省により、本番組の中で問題とされた、宣誓供述書方式が導入された事も産経新聞で記事になっていましたから、当然、綿密な取材をされていたはずの NHK 取材班はご存知であったと思いますが、その採用時期は平成 20 年 11 月の応急派遣団からです。その時点で、それまで、現地における許可や証言を形に残す事すらしてこなかった従来の御遺骨収集の形式は改められ、少しは誰もがわかるように改正され、現地住民から寄せられる情報にも精度が増したと思っています。当然、裁判においても効力のある文書として公証化した事により、少なくとも「フィリピン人の関係者が、日本人だと認めて、持ち帰ってもらいたい」という証言を現場において得て、現場から、集積所に集めておくようになりました。当初は、情報の提供と現場への案内であった委託事業における業務内容がご遺骨の情報収集から集積にまで変わって行ったのも、厚労省にその方法に全て対応するだけの職員も予算もなかったからだと理解しています。その後、宣誓供述書の書き方や記載内容に対する指導もあり、方式も何度か変更され、その都度、現場は大混乱するという事態もありましたが、全て厚労省と協議の上、厚労省の指導の元に作業を行っていた事に間違いはありません。

同番組は我々が現地イフガオにおいて、先に述べた明らかな妨害行為が行われた時に終夜行ったフィリピンで最後の焼骨式（野外におけるもの：これを契機にそれまで、数 10 年に渡って続けられてきた遺骨収集の野外における焼骨式が大気汚染法等に触れるという事で中止の止む無きに至りました）の様子を地元テレビ局から入手して、放送し、その中で「専門家にこのビデオを見せたところ、女子供の遺骨や老人が含まれていておかしい」という主旨のコメントを入れていました。現地を現場をそして、戦争の真実を知らない底の浅い取材の一端がここにも垣間見えてきます。

私の発言を主旨がどうあれ、どのように使うのかは取材者のまったくの自由であるというのであれば、明らかに、それはメディアの傲慢と先行きの自滅を意味します。メディアは、例え、それが NHK という公共放送であったとしても神ではあり得ませんし、当然、間違いも犯します。その間違いを出来る限りなくして放送する事は放送法で守ら

れて、国民から一方的に料金を徴収する権利を有するものとしては最低限の義務です。

更に、NHKは厚労省が現地の確認作業を行う事に対してすら妨害を行おうとした形跡があります。厚労省社会援護局援護企画課外事室長一行が平成23年ミンドロ、イフガオにおける現地確認に赴いた際に、同時期に現地取材クルーを送りこみました。厚労省は公正を期すために、一切のメディアの取材を受け付けませんでした。それでも、彼らは現地に取材クルーを送り、現場に先回りして待ち構えるなど外事室長一行の現場確認の様子を取材しようと懸命に試みたようです。これについては、空援隊現地スタッフが確認しており、裁判上で何か有利になるネタを探していたと言われても仕方のない行動ではなかったかと思います。

恣意的判断で取材内容を勝手に作り変えた偏向報道がされたことを大半の人が知らないままに、(文句が出ないで終わっているもののもしもそれを知ったとしたらそれを許容する人はいないと思います)間違っただけで放送してしまったとしたら、即座に訂正し、その損害を出来るだけ食い止め、形ばかりの謝罪などではなく回復させる事に全力を尽くすのは、人間としての最低限の責任の取り方ではないのでしょうか？

特にNHKのようなスポンサーの意向(良くも悪くも少なくとも何らかの制限を制作者に与えるという意味ではスポンサーの意向は番組チェック機能とも言える)を気にせず制作できるが故に国民から絶大な信用を得ているメディアのする事とは思えません。今回の番組においては特に、出演した、取材を受けた人間が情報提供者の亀井氏側の人以外全てその発言した意図通りに使われず、その意図を捻じ曲げられて使われることなど、言語道断を通り越して犯罪行為以外何物でもありません。

しかも、その結果として、NHKという大メディアの民意に対する影響力を勘案した厚労省の判断により、事業が中止に追い込まれた事によって生じた、時間的空白により、失われる事になった大量の御遺骨の情報や帰れるはずの人(ご遺骨)が帰れないというその損害は償う事など到底不可能です。番組をご覧になった多くの方の印象に、遺骨収容という国家事業に対して償いがたい負の足跡を残した事は明白であり、その損害というのは決して、看過できるようなものではありません。

番組放送直後にフィリピンに飛んで、放送されたような事実があったのかどうかを改めて我々自身の手で確認した所、番組内で発言していたフィリピン人のほぼすべての人がそのような意思や意図を持って話したのではない、と証言してくれました。ところが、我々が現地で調査を始めたと知るやNHK取材陣に同行していた現地コーディネーター村■■氏を通じた、番組出演者に対する嫌がらせも同時に始まりました。これも尋常の内容ではなく、まさに犯罪行為そのものです。その内容とは、当時、出演者たちのうち数名と我々が同番組の内容を検証し、その宣誓供述書を作成した直後にその内の出演者一人に対してかかってきたNHKの同番組の現地コーディネーターを■■氏から電話の内容から容易に推し量る事が出来ました。

横で、我々が聞いており、撮影しているとも知らずに「空援隊の連中が君を殺す為に

探しているのです、引っ越し費用はこちらで出すから、家族と共に身を隠せ」で、あったり、「空援隊からのアプローチには絶対に答えないように、電話番号を至急に変えろ」とか、その後、電話を受けた本人が要約した内容を伝えてくれました。その後も家族あてに同様の電話が何度もかかり、奥さんがノイローゼになり、それが元で、結局、村■氏からの連絡がつかない所へ引っ越しをする事になり、その費用をこちらで負担することにまでなりましたが、まさにやりたい放題でした。その後もどういうわけか、それらの嫌がらせは当隊フィリピン人スタッフにまで向けられるようになり、家の前に置いていた車のフロントガラスが割られていたり、本人の留守を狙って、家族を恫喝するものが現れたり、また、我々の現場で作業をしていた現地スタッフの所へ押しかけて来て、「空援隊はもう終わりだ。奴らが二度と現地に来る事はない。こちら側に、空援隊が得ている国立博物館からの許可証を売らないか」とか「空援隊と一緒に仕事をしているととんでもない事になるぞ。彼らは犯罪者だ。」など、当隊フィリピン本部長に対して、村■氏が持ちかけてきた話と呼応するかのような話があちらこちらで、スタッフの身の回りに起こり始め、現地スタッフも不安になり、日本の空援隊事務局まで直接問い合わせてくるような事もしばしばでした。これらスタッフ達が精神的に被った損害も計り知れないものがあります。

これらが、全て村■氏個人の意思や意図で行われたと考えるのはあまりにも荒唐無稽であり、NHK もしくは亀■氏からの何らかの指示があったのではないかと考えられますし、その方が自然ではないかと考えます。勿論、もっと裏に誰かが潜んでいる事も十分考えられます。

これらの手法は、当隊会員から伺った現在、別のNHKを被告にした訴訟で争われている台湾における取材でも同様であり、これも見過ごす事は出来ません。

つまり、NHK の取材手法には大きな問題と欠陥が存在しており、海外取材であるという気易さから、恒常的に行ってきた事すら考えられ、自分達が主体となっていて行っていない場合であっても、何らかの意味で実質的な共犯である事は論を待たないと思います。更には、情報操作の意図を持って行って来ていたのではないかという疑惑まで思い起こさせてしまうものです。その結果の一つが今回の番組であったと考えられます。真実相当性の事由があれば、根幹と大半が真実でなくとも許される、つまり、何があっても真実相当性という“アリバイ”さえ作っておけば、大丈夫とする判決はそれ自体がメディアの特権を際限なく助長し、更なる新たな被害者を生み出していく素地を作りだしていく事に加担しているようなものでもあります。

<NHK の事実誤認>

本件の番組内で言われている事についてもおかしな点が多々あります。その内の最たるものは現場を知らないからこそ言える事でしょうが、遺骨収集の現場において、どんなに偉い専門家を連れてきたとしても、その場で、遺骨となってしまった骨だけを見て、

人種を特定するなどという“鑑定”の出来る人はいないという事実があります。まず、この部分の理解が全くありません。ということは、彼らの頭の中には、遺骨がフィリピン人か日本人かくらいの鑑定はちょっとした専門家を連れて行けばその場で可能くらいに思い込まされていた節があります。全く、上手く乗せられたというのが正解かもしれないし、彼らもきつとこれから都合が悪くなれば、「知り得る機会はなかった」だの「そんな事実は知らない」「そんな事を言う専門家はいなかった」などとさも悪いのは自分たちではないと逃げに入るのでしょうが、それは彼らの取材力のなさを露呈しているに過ぎず、仮に、そのような言があるのならば、そんな能力もない人間が公共放送のしかも報道に分類されるような番組を作る資格はないと言わざるを得ません。また、長年行われてきた遺骨収集の世界においては、現地の人間を雇用し、労賃を払って、作業をしてもらう事も過酷な環境下における作業に対しごく普通に行われてきたという、遺骨収集をした事のある人なら誰でも知っている事すらも知らなかったのか、あえて、無視したのかはわかりませんが、それを遺骨の売買に無理矢理結び付けました。そこにも大きな作為が感じられます。

従って、フィリピンだけでなく、他の地域においてもどこにおいても、あるいは一般的な常識としても、働いてもらった人に賃金を支払う事はごく当たり前の事なのではないのでしょうか？それとも、御遺骨収集は特別で、そんな事は全て、奉仕としてすべき事で、現地の人であってもボランティアが当然だとでも言われるのでしょうか？自分達が体力的にも能力的にも出来ない作業をしてもらって、それに対して、事が御遺骨だから特別だというのではあまりにもそれぞれの相手の国の国民に対して、失礼だと思わないのでしょうか？相手国の国民も当然のことながら、戦争において多くの方々が命を落とされていますし、それらに対する配慮をするのは当然であろうと考えますが、それすらなされないのはどういう理由なのかさっぱり考えつきません。未開発国の収集地域に住む人たちは、上手く言いくるめて、はした金や土産物でも握らせて使い捨てればいいのだとでも考えておられるのでしょうか？

実際に、私が空援隊を設立する直接の動機となった事件の事を少しお話させていたきたいと思います。

平成17年11月のレイテ島における政府派遣団の取材をした時の事です。それまで、何度、御遺骨情報を持って行っても一切聞いてもらえなかった厚労省の収集団がレイテ島に派遣されるという事を聞いて、すぐさま、厚労省に確認を取り、取材に入る事にしました。そして、現地に行ってから、つい昨日まで、日本の政府派遣団の運転手をしていたという人物を雇う事が出来、(勿論賃金を支払います)ずいぶんと幸運に助けられ、無事に、政府派遣団が作業している地域の山中へと行きつく事が出来ました。

そこでまず見たのは、現場の穴掘り作業を現地で雇った人たちにすべて任せて、自分達はほとんど腕を組んでみているだけという現場監督にすらならない政府派遣団員達

の姿でした。そして、夜になると毎晩宴会で、宿を貸していた人からは後に大きな苦情が出て、後始末に困るくらい部屋をめちゃくちゃにしている姿や深夜になって、宿を抜け出して、女郎買いに精を出す人までいる始末に、もうあきれて声も出ませんでした。そして、4日間位だと思えますが連日、同じ所をひたすら掘り続けて、結局、一体の御遺骨も見つけれないという状況にあきれ果てながらも取材を続けていました。そんな中で、毎回昼食を取る時、山の中での作業ですから、昼食は昼頃になると麓から大きなお皿などに入れて運びあげられてきます。そして、日本人の参加者達は屋根のある扇風機まで回っているテーブルに座って、昼食となるわけですが、実際に作業をしていたフィリピン人達には自分達を取りたいだけ取って、その残りの皿を投げ与え、炎天下で食器もろくになく、まるで、動物に餌でも与えるようにして、まさに、下げ渡している様子を見て、彼らの心の底の部分にあるメンタリティーを目の当たりにしたショックは忘れようもありません。また、この時、あまりに情けない状況にあきれ果てて、全く派遣団とは別に、聞きこみ取材を開始しました。そして、ほとんど行ったこともない地域で、聞き込みを始めて、ほんの数時間で実際に派遣団が作業をしている場所から数十分で行きつける所に御遺骨を発見しました。そして、すぐに、その状況をカメラに収め、派遣団の元へ取って返して、「収集して下さい」とお願いしたのですが、「今回の収集予定地域から外れているから・・・」などという理由で取りあってくれず、長時間の交渉の末、最終的に、派遣団長とガイドと鑑定人(前出のダタール氏)だけが現地まで見に行つて、その洞窟からの回収はしてくれましたが、結局、その時には持ち帰らないという結論になり、あまりの事の成り行きに茫然自失の体でした。この時の様子は雑誌フライデーに同行していた別のフォトジャーナリストにより記事掲載され、そこに私の名前も記載されていた為に、その後しばらく、厚労省外事室への実質的な出入り禁止状態におかれたりもしました。その後、数度の派遣団に、外部サポートとして参加しましたが、我々が主体的にモノを言えるようになるまでは、日本人参加者は決して、フィリピン人スタッフなどとは一緒に食事すらしないし、人間扱いもしていなかった事も敢えて、申し添えておきます。これらは現在は、少なくとも、フィリピンにおいて、我々が行っている活動の中では絶対にあり得ない事である事も申し添えておきます。

空援隊が、厚労省から委託事業を受託した前年の11月にフィリピンと日本の国と国との合意によって担当する官庁同士が定めた方法(宣誓供述書をフィリピン国立博物館員と厚労省職員が確認した上で、遺骨の検分を行い、了承されたものだけが火葬に回されるというもの)に従って、委託事業受託後は特に厚労省とも綿密な協議を重ねつつ行ってきた事業である事は、取材と言うほどの事をしなくても、電話一本で確認できる程度の内容です。しかし、それらをしなかったのには何故なのか、いまだにわかりません。やはり初めから何らかの意図があったのかもかもしれません。

空援隊が委託事業を受託するまで、厚労省からの委託事業を日本遺族会以外の団体で受託するところはありませんでした。それと言うのも日本遺族会が大きな、実績のある

団体であり、元々、厚生労働省設置法に、戦没者遺族の利便に供する事や支援が挙げられている事からも容易に理解できます。その遺族会から、得体の知れないNPOごときに厚労省が委託したという事実は関係各位にかなりの衝撃を持って受け止められたようです。それまで、誰も本腰を入れて、遺骨に関するまともな情報収集などを行ってきた形跡はありませんでした。日本国内のネットワークに終始し、その戦友やご遺族に残された古い情報だけを頼りに情報収集に努め、年に数回現地に行って、確認出来るものを収集するというのでは元々無理があり、限界であったのでしょう。それをまるで幕末の黒船のごとく、もう、遺骨収集は終わるという頃になって、突然、新参者が表れて、次々と昔探したはずの地域をも再度調査して、どんどんと御遺骨情報を集め厚労省に正式に報告し始めたのですから、それまでの余暇や趣味の都合でのんびりとやってきた世界とは全く違うものが目の前に出現し、今までの自分達の功績がかき消されるのではないかという危惧もあったのかもしれませんが、しかし、それだけでこれだけ執拗な妨害工作をされるとはとても思えません。もっと、現実的利害のある部分に我々が知らず知らずに足を踏み込んでいたのではないかという大きな疑念が逆に湧きおこりました。

ご遺族の方々の意見も色々と聞かせていただきましたが、多くの方々は「遺骨が返るのは大変嬉しい」と素直に喜んでいただけたようでしたが、一部の方々には「もう戦後60年以上も経って、遺骨などもうない」という方や「やっと現地の草生す屍となっているので、もう静かに眠らせてやりたい」という人たちもかなりの比率でおられる事に驚きましたが、そのような人たちに「それでは、我々の見つけた御遺骨が例え、あなたのお父上でも洞窟や草むらに放置されるのですね」と聞き返すとほとんどの人たちが黙ってしまわれました。

戦後の遺族に対する政府や国民の姿勢が彼らの心の中に大きな傷跡を残しているのだなと感じた瞬間でもありました。つまり、本音の部分では御遺骨には帰ってもらいたいと皆が思っているにもかかわらず、金がかかるとか時間がないとかいう理由をつけて、やってこなかった事に対する悔悟の念はかなり大きいのではないか。その上、その心情に付け入って、寄付や支援を取り付け、海外の戦没者がなくなった地域に乗り込み、まるで支配者でもあるように現地の人間に金をばらまいて、彼らに作業をさせ、自分達は毎晩、「献杯」と称して宴会を催すような事をしてきた人たちにとっては、実に目障りな存在であった事実も見逃せません。更には、現地のネットワークがどんどん強固なものとなり、現地行政府などとも繋がりますと別の面から、邪魔になる人たちも出てきたようです。フィリピンの現地行政府と日本政府との繋ぎ役を自認してきた人たちはその大きな収入の原資であり、彼らの力の源泉でもあるODAにおける額面に対して通常3割とフィリピンで言われている「口利き料」が自分の前から消えて行く恐怖を味わったのかもしれませんが。日本人会のように、長い間、フィリピンの地で何も知らぬことなどないと公言してはばからない人たちが在外公館の顧問や日本人会の役員などを歴任されているようですが、彼らにとっても、同様に都合が悪かったのでしょうか。

ともかく、厚労省は委託事業を空援隊に委託しました。これについても、空援隊顧問団から厚労省に対する圧力があつたからだと誤解した人が大半でしょうが、空援隊顧問団に現実には我々が圧力をかけてくれ、などとお願ひしたことなど一度もありませんし、今後もお願ひする事は決してないでしょう。空援隊顧問団に名を連ねていただいた方々は、純粋に、残念ながら御遺骨をなつてしまわれた方々に故国の土を踏んでいただくという事だけで賛同していただいたにすぎません。それでも、前出の人たちによる執拗な嫌がらせと遺族という名と立場を使った圧力=票をちらつかせた脅しまがいの怪文書まで使つた犯罪行為によつても当隊顧問の座から降りないと頑張つてくれている先生方に、本当に頭が下がる思いでいっぱいです。勿論、顧問の先生方と一緒に現地を訪れたり、活動報告などは常にしてきましたが、それによつて、圧力をかけたなどという事は一切ありません。しかし、これら先生方の名前の持つ力を厚労省が重い腰を上げるための、最初に動く時の梃子にさせていただいた事実はありますし、その面でも大変感謝もしています。その現職議員である顧問の先生方にお掛けした迷惑も、お辞めになられた先生方も含めて、償つて償いきれるものではありません。

本件番組放送後に、追隨するように新聞各社や週刊誌などのメディアが次々と追隨記事を掲載されました。そのほとんど全てが電話取材だけでしたので、本当に記者さんかどうかすら分かりませんが、彼らには彼らなりの節度もあり、理解できる範疇であつた為に続けて告訴という事にはなりません。その後も執拗に空援隊の背後関係や顧問の先生方への政治献金の有無なども含めて、特に、朝日新聞などは取材を続けられていたようですが、それも事実無根である事が逆に証明されてしまったようです。特に、朝日新聞のマニラ支局長などは当隊顧問団会長の阿部知子先生にずいぶんと失礼な電話取材をしてきて、阿部先生からの「きちんと空援隊からの話も聞いてみたら」という問いかけに対して、「あんな悪い奴らの取材などしても仕方がない」と回答したと言います。

メディアの質の低下が言われて久しいですが、まさにその通りの出来事を現実に目の当たりにすると驚きを通り越し、怒りをも起こさせないような脱力感しか生まれない事に逆に脅威を感じてしまいました。

本当に原審判決のような荒唐無稽な間違つた判決が高等裁判所においても繰り返される事のないように切に願ひます。

以上